

海外アダム・スミス研究の動向

—— 人文諸科学におけるその興隆と「アダム・スミス問題」の復活を中心に ——

大 島 幸 治
佐 藤 有 史

I はじめに——在庫調べの必要——

21世紀初頭に、ブラウグは欧米、とりわけアメリカ合衆国の大学カリキュラムにおける経済思想史講座の理不尽とも思われる縮小にもかかわらず、研究者間にはそれと正反対の傾向が見られることに注意を向けた。すなわちこうした状況においてすら、今日、「もろもろの経済思想史学会に出席し、経済思想史に関する論文を公刊する学者たちは、ますます増えているように見える。思想史の諸学術誌は急速に成長しつつあり、それらの質は高く、着実に改善されつつあるように思われる」(Blaug 2001, 145. 強調は追加)。

そしてブラウグによれば、そうした経済思想史研究の興隆において、アダム・スミス研究こそが他のどの研究対象にも増して群を抜いて量的に増大しつつあるのである。「彼〔スミス〕の著作物のさまざまな側面についての著作や論文の氾濫は全く驚くばかりであり、われわれは新たな在庫調べ(a new stock-taking)を強く必要としている」(158. []内は追加)。

こうしたスミス研究の氾濫の原因について、10年ほど前にトライブは、(1) 経済思想史家たちによる持続的なスミスへの関心、(2) ケンブリッジ・パラダイムによる思想史研究の興隆、(3) マルクスに代わる市場経済批判者としての

スミス像の出来、(4) 「言語論的転回(linguistic turn)」を経た批評理論(critical theory)の旺盛な対象開拓の結果としてのスミス研究の横溢、以上を挙げた(Tribe 1999, 610)。

さらにその後、ラビオは人文諸科学におけるスミス研究の興隆の理由として、(1) 文芸批評理論の旺盛な対象領域開拓、(2) 一部の経済思想家による批評理論の援用が人文諸科学と経済学の交流を深めたこと、(3) とりわけディアドラ・マクロスキーの諸著作による経済学と修辞学との関連に人文諸科学が影響を受けたこと、(4) カルチュラル・スタディーズの興隆が学際的研究を促し、ひいてはスミス研究を旺盛にしたこと、以上のようにまとめてスミス研究文献を紹介した(Labio 2006, 151-52)。

本稿は、こうしたトライブやラビオに紹介され、さらにはそれ以降に2008年まで出来た、主に古典研究から哲学研究にまで至る人文諸科学分野における近年の海外スミス研究の「在庫調べ」をわが国の学界に提供することを目的としている。そうした諸研究のなかには、スミスの『修辞学・文学講義』(Smith 1983. 以下LRBLと略記)における修辞学や文体論、さらには言語論などに基づき、『道德感情論』(Smith [1759] 1976. 以下TMSと略記)や『国富論』(Smith [1776] 1976. 以下WNと略記)におけるスミス自身のレトリックを比較対照したり、シ

ヴィック・パラダイムの視点を深化させる視点からスミスのギリシア・ローマの文芸、政治思想への記述を評価・検討したりする諸研究も少なからず見られるようになった。またスミスの「公正な観察者」概念について、ストア主義なのかキリスト教なのかをスミスの宗教的言説に内在して検討しようとする研究も増えている。

本稿の内容はこうである。第II節では、古典文学とスミスとをめぐる近年の諸研究が俯瞰される。その際、スコットランドの宗教的背景にも注意が払われる。第III節では、主に修辞論・言語論に関連したスミスの最新の諸研究が紹介される。第IV節では、近年における「アダム・スミス問題」の復活が論じられる。この問題は、ブラウグが述べたように「[アダム・スミス]問題は立ち去るのを拒否し、アダム・スミス産業のその他すべての論文において頭をもたげている」(Blaug 2001, 158. []内は追加)だけに、格別に注意が必要である。そしてそれとの関連で、これもまた近年再燃してきた「スミスとルソー問題」についての諸研究が触れられる。そして最後に、若干の所見が述べられるだろう。

II 「古典学者」スミス

1990年代の半ば、V.ブラウンは、TMSの徳性論にはストア派による「徳性の序列(moral hierarchies)」論の影響が色濃いことを指摘し、対話的な言説の産物である「公平な観察者」概念は、ストア派の内部討論(inner debate)論がベースをなしているとした。ブラウンによれば、対話的言説をモデルとした自己規制(self-command)と慈恵(beneficence)概念は上位の徳であるのに対し、慎慮(prudence)と正義(justice)は下位の徳であり、社会的な合意、衡平に関する「訓話的な声(didactic voice)」の産物であった。そして彼女は、前者がprivateなmoral virtueであって、後者はpublicな徳性であると指摘した(Brown 1994)。こうしたTMSのストア主義的傾向は、グラスゴウ版編者をはじめ数多

くの研究者が一樣に指摘してきたところでもある。ブラウンがスミスにおける自己の二分割や「鏡」の比喩がストア派を起源とするものであることを明確にした功績は、きわめて大きい。田中は、自然(利己心)の昇華のために自己との対話の必要性があるとして、ブラウンの議論を高く評価している。すなわち、「称賛にあたいすること(Praise-worthiness)」の追求主体として想定された「観察者」は、世論=称賛を判断原理とできないので内なる第三者との対話性(独語)を強めざるを得ないが、外なる第三者視点の一人称化だけでは、利己心の抑制はできても性格改善はできない。「道徳感情の腐敗防止や性格の歪みの是正のためには、想定された公平な観察者としての内なる第三者との対話(独語)による自然の揚棄が必要になる。ヴィヴィエンヌ・ブラウンの強調する『感情論』の対話性の根拠はここにある」(田中1997, (下)205)。

しかしブラウンの強調するストア的な観察者に基づく対話式討論の文体が積極的に展開されるのはTMS第6版においてであることから、6版の記述によってTMSの論理全体を代表させることに対する疑義が提出された。田中(1997)は、TMS初版の観察者論は、キャンベルが指摘したような「人-人」関係の裁定者としての自然法的第三者視点論に過ぎないとして、初版と6版との論理の差異を重視している。TMSについては初版と6版とでは種々の明確な性格の違いが見てとれるのだが、各版に記述の異同があることを単なる議論の明確化、わかりやすく改善しただけと見るか、あるいは重大な論理上の修正を含むと見るかにより、初版vs. 2~6版、初版・5版vs. 6版、初版~6版一貫説(例えば妹尾2007)など、さまざまな解釈が提示されている。

近年のスミス言語論やLRBL研究の進展により、TMS初版の観察者論を「人-人」関係の裁定者としての自然法的第三者視点論としてと

らえる以外に、コミュニケーション論→TMSの視点から対話的論理は最初から前提されていると解釈するもの、あるいはコミュニケーションの前提となる人間の作用因としての旺盛活発な活動を、ハチスンの『情念論』(1728)の自然の構造認識の延長線上にある「感情論」の枠組みにおいて論理化したものと解釈する試みなどが見られるようになってきている。

そこでローマの歴史家の修辞学を豊富に取り上げているLRBLの議論を詳細にフォローすることによって、スミスのストア派に対する関係をより踏み込んで相対化していくことも検討されるべきであろう。

スキナーは、『自由主義に先立つ自由』(Skinner 1997)において17世紀イギリスの共和主義者たち、ジェームズ・ハリントン、ジョン・ミルトン、マーチモント・ニーダムを検討し、必ずしも王政廃棄を求めていなかった彼らを、共和主義者ではなくネオ・ローマ理論家と呼んだ。彼らは共通して、マキアヴェッリを通して古代ローマの歴史家、法学者、道徳学者に学んで、個人が平等に参政権を保障された国家ではじめて自由になれるとする自治的国家観、個人的自由を問題としていたが、スキナーは、これを政治体制と個人の自由とを切り離すホップズと対立するものとしてとらえた。

スキナーは、マキアヴェッリの『リウィウス論』(1517)の影響を取り上げて、市民的な偉大さと富、個人的自由が享受可能である自由国家を論じた。この著書では、もちろんスキナーはスミスには言及していないが、LRBLでスミスがリウィウス(Titus Livius, 59 B.C.-A.D.17)に頻繁に言及していること、またグラスゴウ版付録の匿名氏、アミクスの会見記にもスミスがリウィウスを古今の歴史家の中で最も好んだという逸話があることが周知の事実であることから(LRBL, 229/訳347)¹⁾、LRBLで言及されている古典時代の歴史家による修辞学は、スミスの自由観と政治思想、倫理思想の一断面を照射

するものとして関心を呼ばずにはおかない。

1984年の原著イタリア語版の拡大英語版である『アダム・スミスと古典文学』(Vivenza 2001)は、著者自身によってその意図は表明されていないが、シヴィック・ヒューマニスト・パラダイムならびに自然法パラダイムの文脈で、前記スキナーの視点を別の角度から掘り下げた研究として注目すべきものである。スミス研究において、ストア派との関係を検討したものは多いが、LRBLにおけるスミスの古典文学の扱い方自体をこれほど詳細に検討したものはほとんどない²⁾。

本書の構成は、第1章「スミスの自然哲学と古典との関係」、第2章「スミスの倫理学と古典文学の継承」、第3章「法学講義とローマ法との関係」、第4章「分業と価値論」、第5章「スミスと古典文学」からなるが、節の数、分量から言っても第1章-3章にウェイトがある。スミスの引用とギリシア語・ラテン語の原典とを対照させて、スミスの記憶ちがいや原典のニュアンスとのズレ、あるいは変更の背後にあるスミス独自の考えを抽出しようとしている点が興味深い。

第1章ではスミスの天文学史、古代物理学史、古代論理学と形而上学の歴史を取り上げ、スミスの自然哲学と古典とのつながりを考察している。ここにおいてヴィヴェンツァは、少数の単純な原理から自然の継起的な連鎖とその背後にあって目に見えない結合原理を発見し、構成し、その説明のあり方を説明者が対象とした世界の経験を例示するものとして読み解く、という方法意識がスミスの方法であると説明する。人間の観察力と分析力は歴史を通じた経験によって異なってくるから、次々と現われてくる文化的状況によってそれまでの体系では説明がつかない事態に直面する。その驚異と意外性から来る不安を平静に立ち返らせる想像力によって、自然の説明体系は廃棄されていくことになる。こうした議論は、すでに只腰(1995)や山崎(2005)

といったスミスの天文学史, 古代物理学史, 古代論理学と形而上学の歴史や LRBL に関する論考を手に行っているわれわれにとっては, 議論の詳細さやボリュームの点でも, それほど耳新しいものではない。

第2章では, ポリュビオスとスミスの同感概念との関連性を指摘したスコットランドの歴史学者・古典学者ジョン・ギリス (John Gillies, 1747-1836) の議論に注目し, それを憤慨 (resentment) 概念に関連させて論じている第4節が目を引き³⁾。ストア派では, 「憤慨」は社会的に危険なものと思われていたのに対して, それを侵害に対する自然的反応と位置づけ, さらにそれは正義の不可欠の性質を前提するものとして自らの正義概念の基礎に「憤慨」概念を位置つけたスミスの独自性と, ポリュビオスを結びつける視点はきわめて興味深い。もっともヴィヴェンツァによると, ポリュビオスの同感論は, 恩知らずな振る舞いを観察すると, 理性の働きによりそのような振る舞いが過去に導いた出来事を想起し, おそらくは自分の不利になるような事態が起こることを予見し, その結果, 被害者側に立って加害者に憤慨の感情を抱く…といったプロセスを経る。

これに対しスミスの同感論は, 観察者の反応は理性からではなく, 被害者の感情を共有するという直接的な感覚に端を発するのであり, 行為に関わるすべての事情が明らかになった後で, 行動の適宜性が「公正な観察者」の是認を得る, とする。ヴィヴェンツァは, スミスにおいても感情の要素と理性的な計算が関わるが, そのあり方はポリュビオスとは異なっていると述べ, スミスの同感論がアリストテレスの倫理学に依拠して理性の働きを媒介させるポリュビオスの同感論に由来するとするギリスには同調せず, むしろ被害者の憤慨感情を正義論の基礎に据えている点に両者の類似性を見出している。こうしてヴィヴェンツァは, スミスの古典からの引用と原典の逐語訳とを対比させ, スミ

スの思い違いやニュアンスの差異を掘り起こすことによってスミス自身の構想を逆照射しようと試みる。さらにはスミスの道徳哲学をポリュビオスからの発展だとするギリスのアリストテレス翻訳に見られる, スミス寄りの解釈や訳語まで見出し, その影響力を見ている。スミスの同感論, 正義論における「憤慨」感情に注目する視点を, ポリュビオスなどの古典文学と結びつけているのは興味深い⁴⁾。

第3章以下, 議論全体が古典文献の原典との比較対照に立脚している点に興味を惹かれるが, 全体的に記述が簡略で, もう一步, 詳細な踏み込みに欠ける印象は否めない。しかしこのような古典文学の原典との対照作業を踏まえてスミスの LRBL を再評価しようという動向は, 日本においてもさらなる展開が期待される。

周知のように LRBL は, 失われた「エディンバラ公開講義」が元になっていると言われていたが, 残された筆記ノートは 1762-63 年のものであるという事実は, 動かし難いので, LRBL から TMS 初版の論理を論ずることの妥当性は自明とは言えない。しかしその難点を承知した上でなお, コミュニケーション論 → TMS の視点から見えてくるものから TMS 初版と 6 版との差異をどう評価するか, という問題関心は残るであろう。

ヴィヴェンツァの古典の原典とスミスの記述の比較対照という方法は, 興味深い。講義を行なった当時のスミスの年齢を考えると, いかに学友ジェームズ・エドガー (James Edgar) と競争で古典文学を暗記することに励んだ学生時代を過ごしたとは言え, その該博な知識はカーコーディ町立学校で学んだデイヴィッド・ミラー, グラスゴウ大学のアリグザンダ・ダンロップ, ジョージ・ロスやハチソンの教育を反映したものであろうし, この時代におけるスコットランド人文主義の伝統を反映したものだと考えられるからである。ならばヴィヴェンツァの方法をさらに踏み込んで, 過度に自由意志を主張

する英国化したアルミニウス主義やセミ・ペラギウス主義的な主張と対立しているのがスコットランドのカルヴァン主義の伝統（穏健派を含め）であるから、スキナー的な「ネオ・ローマ理論家」概念との微妙な距離感にも目を向ける必要があると言うこともできるだろう。

スミスの宗教観にも関連する問題であるが、近年、サミュエル・ラザフォード (Samuel Rutherford, 1600-1661) といったスコットランドの後期宗教改革者（同時に、厳格な長老主義者、教会政治家、政治理論家、人文主義者、プロテスタント・スコラ主義者等としても知られている）についての教理史的研究が進展している。またシュタインメッツ (David C. Steinmetz)、シュライナー (Susan E. Schreiner)、トンプソン (John Lee Thompson)、オーバーマン (Heiko Oberman)、ファーバー (Jelle Faber)、ヘルム (Paul Helm)、ミュラー (Richard A. Muller) といった神学研究者たちにより、プロテスタント・スコラ学とカルヴァン主義との関係における非連続性の強調から、その類似性と連続性についても肯定的にとらえる見方が定着してきた。これにより 17-18 世紀の長老教会穏健派とスコットランドの諸大学に顕著に見られる人文主義の伝統との関係についても一定の光をあてることができると考えられる。

17-18 世紀のスコットランド長老教会の改革派正統主義は、一方にイエズス会があり、他方に人間の自由意志に関するアルミニウス主義という論駁相手を抱えていた。また罪に対するキリストの充足 (Satisfaction) 説は神の無償の許し (free forgiveness) 概念と矛盾するとして批判するソツツイーニ主義が一方にあり、奴隷意志論を極端に進めた無律法主義 (Antinomianism) という論駁すべき相手も抱えていた。

カトリックを論駁するためには、学問する実践的な道具として、アリストテレス的スコラ主義の形而上学、体系主義、合理主義の土俵に上らなければならないし、アルミニウス主義の

自由意志論相手には人文主義の伝統に乗らなければならない。その意味でスコットランドの知的土壌は、人文主義が根本的にスコラ主義と異なるというものではなかったのである。当時の文脈からすれば、カルヴァンの神学は改革派神学の唯一の査定基準でもなかったし、また人文主義のみが当時の学問的・神学的コンテクストの重要基準だったわけでもないとされている。標準的教理史であるペリカンの『キリスト教の伝統』第 5 巻でも 17 世紀末-18 世紀の恵みと自由意志をめぐる弁証法的関係をめぐった議論にアウグスチヌスが導入されていた事情を述べているが (Pelikan 1989, 82-83)、邦語文献としては、村川 (2008) がアウグスチヌスとの関係に言及している。改革派正統主義とプロテスタント・スコラ主義をめぐる議論としては、金 (2008) が、120 ページ余の神学研究書であるにもかかわらず、膨大かつ有益な書誌情報を提供してくれている。

III 修辞学者・言語論者としてのスミス

修辞学者スミスに最初に注目したのは、グラスゴウ版スミス全集出版に連動して編まれた『アダム・スミス論集』に収録されている Howell ([1969] 1975) である。この論考を収録したハウエルの『18 世紀イギリスの論理学とレトリック』は、周知のように 18 世紀イギリスの新しい論理学の構築とレトリック理論とを密接に関連させ、スミスの LRBL を同時代の文芸諸団体の活動や大学における論理学教育の変遷の中に位置づけて評価しようと試みた画期的なものであった。

これを出発点として、さらに踏み込んで言語学の立場からスミスの修辞学、言語論に関心を寄せた論考が登場してきたが、例えばエンダーズ (Endres [1991] 1994) は、WN 第 4 編 第 5 章ではスミスが意識的に LRBL で提示した「解説」や訓話的レトリックをもちいていること、それが説得という目的とスミスが対象とした聴

衆の好みやスミス自身の気質に適合していることを論じた。同様にバイザーマン (Bazerman 1994) もスミスの経済理論が提示している説得力ある議論の項目が LRBL で構想していた修辞学的言説分野の用語を用いることによって説得力を増している点を指摘している。また 18 世紀文学における音の象徴性の議論にスミスの言語論を引き込んだテリー (Terry 1999) なども挙げることができよう。これらは、従来の経済学者、道徳哲学者スミス像とは大きく異なっており、もっぱらスミスの言語論、修辞学に内在したものとなっている。

近年の研究において、LRBL で展開された修辞法と TMS の文体との関連を分析することに特に関心を寄せたのはグリズウォルド (Griswold 1999) である。グリズウォルドは、その大著の序章において、啓蒙の陰の側面、スミスの著作にある啓蒙と反啓蒙…といった形で、シヴィック・ヒューマニズム・パラダイムではとらえきれないスミスの多元性に目を向けている。彼は、「スミスの近代に対する診断と治療法は、もろもろの徳（とりわけ正義の徳性）についての彼の分析に対してばかりか、情動や公正な観察者や同感の理論に対しても、かなりの注意を払わねば理解できない」(20) と述べ、徳性の上に打ち立てられた道徳性のモデルと規則や法律上の道徳性とのズレがあることに着目し、スミスは「公正な観察者」と道徳感情の理論にフィットするように判断と文脈を強調したとする。

さらにグリズウォルドは、スミスの修辞論の微細な特徴に目を向け、それを TMS, WN に一貫した方法視点に立ったものであることを示そうと試みているが、その一例として、彼がマーシャル (Marshall 1986) の影響を受けて、スミスの修辞論にある演劇的な要素についても論究している点が挙げられるだろう。グリズウォルドによれば、スミスが公正な観察者の道徳的判断について記述するとき心に描いているのは、

行為者を舞台に立つ役者とし、その演技を見ている構造だという。グリズウォルドが証拠としてあげているのは、TMS (第 VI 部) における (agent ではなく) actor という用語であり、また LRBL の用例である。これに対して、ラフィルは、当該の TMS の記述は 1790 年の第 6 版で追加されたものであるから、この actor 一語をもってスミスの「公正な観察者」一般にあてはめるのには論拠としていささか弱いと批判する (Raphael 2007, 2-3 / 訳 2-3)。

だがスミスの「公正な観察者」概念に演劇的な構造を見出すのは、グリズウォルドの独創ではない。デュピイが、マーシャル (Marshall 1984, 600-01) やシュミット (Schmidt 1985, 119-20) を引用しながら、スミスの同感論の構造を、観客はただ舞台を見ているのではなく、感情移入して演じる役者の立場に身を置きながら演劇を見ており、役者はそれを意識しながら、そういう観客の反応を自分を映す鏡として受け入れられるよう演技を工夫する…といった複雑な鏡像関係にあるものとして描き出している点を見ると (Dupuy 1992)、グリズウォルドの分析視点はあながち突飛な独創とは言えない。修辞上の一語に拘泥した牽強附会ではなく、LRBL の議論を TMS, WN に連続させて見ようとする 1970 年代以来の研究の流れに位置づけることも可能だろう。

グリズウォルドの大著をすべて検討する紙幅はないが、彼のレトリックから TMS を考察する方法について指摘しておきたい。第 1 章は、スミスがエディンバラの修辞学に関する公開講義で学者としてのキャリアを始めた事実から始まる。そのため TMS のレトリック上の独自性として、(1) TMS が当時の哲学的著作の通例に従わず Introduction を持たない (WN には Introduction and Plan of the Work がある) こと、(2) TMS がいかなる問題に対する解答を追求したものがわかるのは結論の第 VII 部に至って (VII. i.2) であること——この

構成が日常の道徳的自己了解を倫理的に理論化するという意図を反映していること、(3) 大文字にするか小文字にするかにこだわるスミスが第 VII 部を *Of the Questions which ought to be examined in a Theory of Moral Sentiments* (5 版までは *a theory of moral sentiments* と表記、下線は追加) しているのに、表題としては大文字定冠詞の *The Theory of Moral Sentiments* としていること——スミスの一般的な姿勢として自分の道徳哲学が当時の *best treatment* であると考えたとしても、それが *finality* (決定版) であるとは考えていたはずはないこと、(4) スミスは *theory of moral sentiments* というフレーズを考案したが、哲学書の表題に *theory* を用いた例はスミス以前にはほとんどないこと、などを次々と考証していく。

またグリズウォルドは自ら「説得的 (*protreptic*) We」と呼んでいるが、TMS で使われる代名詞 *we* に注目し、それが LRBL の公的弁論をめぐる議論でスミスが用いた古典修辞学的な *Narration* (解説) の文体と関連すること、またグラスゴウ大学でのスミスの講義の語り口を反映したものであること、さらには一定の見方で物事を見て感じて判断するよう、そして一定の仕方で行動するよう促す実践道徳論としての性格を反映したものであると指摘する。またグリズウォルドは、スミスの *we* に前述の演劇的關係を読み取り、“*we agents*” と “*we spectators*” との相互の鏡像関係を見て、そこから *we* に行為者と観察者の演技者と観客の関係をバルコニーから見ているメタ・レベルの視点を見いだす。

こうした分析によって、スミスがときどき使用している単数形一人称 “I” は、行為者あるいは観察者としての “*me or you*” の意味であり、時折、登場する二人称 “*you*” は “*any one of us*” の意味で使用していると述べるが、特に “I” が登場するのは、観察者が一人で二人の競争する役者 (行為者) に関わる複雑なケースにおいて同感 (*sympathy*) や是認 (*approbation*) の関係

について指摘する技術と関係しているとする。

このようにグリズウォルドはスミスのレトリック上の技術に踏み込むが、他方で、レトリック理論自体について、あるいは同時代のレトリック理論や文法論との比較についてはほとんど言及がない。スミスの語り口やその意図を解剖しようとする試みは、重要でありながら未開拓な部分でもあり、さらに精度を上げていく余地があるだろう。

他方、マケーナ (McKenna 2006) は、グリズウォルドの研究を踏まえて適宜性 (*propriety*) をキーコンセプトとして修辞学者としてのスミスを検討したものである。マケーナは、第 1 章「スミスと適宜性の問題」において、適宜性がスミスの修辞学と倫理思想の基本概念であり、自由市場資本主義経済と上流社会の道徳性を巧妙に進展させるものだととらえる問題設定を提示する。正確に、明瞭に、適切なコミュニケーションをとることにより聴衆の同感を得る文体上の美点という LRBL の修辞学的適宜性概念が「ジェントルマンの人格」を生み出す「より良い人々」を模倣することで最もよく身につくもの (確かにスミスは LRBL 第 2 講で適宜性を形成するのは国民の慣習であり、文体の諸規則は上流の人々の慣習から引き出されると述べている) であり、自己の内なる観客、良心という「公正な観察者」の是認を得られるような行動様式としての TMS の適宜性は *hegemonic* だとして退けられやすいやり方で打ち立てられているという留保をつけながら、スミスが修辞論において商業社会における自然な言語である平明な散文体を称揚したことを評価している。

マケーナは、スミスの経済思想においてコミュニケーションと説得が重要である (交換性向 ← 説得性向) ことを指摘し、スミスにおいては適宜性概念があらゆる社会的関係行為を媒介しているとする。マケーナは、適宜性概念がレトリック理論や理論史で言及されてこなかった理由を、(20 世紀の古典学者 Craig LaDriere

を引用しつつ)人間の経験の本性に根ざした、あまりに明白で直感的なものと考えられたことを挙げるが (McKenna 2006, 3), これをロラン・バルトの議論と結び合わせるなど、その視点は非常に広範囲に及ぶ。

特に興味深いのは、フィッシュ (Fish 1994) を引用して、J. L. オースティンの発話行為論における事実確認的 (constative) 発言機能と行為遂行的 (performative) 機能の分類に基づき、「真偽」という基準が妥当しない行為遂行的側面に対して「適切 (felicitous)」という基準を適用する議論とスミスの適宜性概念を重ね合わせて検討することも行なっている点である。マケーナは、スミスの適宜性の問題との対比において、現代におけるレトリックの適宜性の扱いが、レトリックが現実を構成するという現代のソフィスト的見解⁵⁾に傾いていることを指摘しただけで、残念ながらそれ以上は踏み込まない。しかしオースティンに言及した点は、スミスの言語起源論の認識論的特性を検討する重要な問題意識につながるだろう。

例えば LRBL 第 3 講よりも TMS に収録された「言語起源論」の記述の方が特定の対象についての経験と観察が同一の語で言い表される点が明確になるが、どちらにおいても始原の言語では一語が長い文章を表していて、発話の行為遂行的性格を持ち、そこに発話内行為と発話媒介行為を読み込んでいるという側面が見て取れることがある。適宜性に関わる行為遂行的側面を掘り下げていくと、スミスの認識論が、まず概念が成立しているところで繫辞 (copula) による SVC 構文の集積がバラバラの経験を統合していく概念論理学であると言い切れない側面が見えてくる。つまり発話内行為や発話媒介行為を内包した word から命題がまず成立し、その後に概念が成立する、という認識のあり方である側面 (とくにルソーやモーペルテュイと並べてみるとそう見えてくる) も否定できないように思われるからである。

一般に、カルナップが主張する命題論理学的認識論以前のすべてを、カント的な概念論理学的認識に分類して批判し、18 世紀の古い認識のあり方はみなそうしたものと見なす通説的な視点がある。スミスの言語論とその認識論の構造について、こうした問題を掘り下げる作業はスミス研究の動向の一つとしても今後の課題となるだろう⁶⁾。

マケーナは、第 2 章「スミスと古典文学の伝統における適宜性」でアリストテレスの適宜性概念を中心に周辺に議論を広げローマ時代の修辞学者を検討し、第 3 章「18 世紀の言説理論における修辞学上の適宜性」でベーコン、ボイル、ロックといった科学的言説における適宜性概念を検討した上で、趣味や美学分野におけるロック、シャフツベリ、ハチスン、さらにはフランスのラパン、シャルル・ロラン、デュボスなどを展望する。興味深いのは、ハンナ・アーレントやハーバーマス、ティモシー・ディクスタルなどを持ち出して、レトリック的適宜性を教育する上で中心部分を提示した議論としてアディスン、スティーラの『スペクテイター』誌を検討している点である。『スペクテイター』誌は、初期のマスメディアとして proto-mass society の到来に寄与したとしているが、マケーナは特にコミュニケーションの形式のモデルとなった点を指摘する。そうした脈絡にあるものとして第 4 章「LRBL における適宜性」、第 5 章「TMS における適宜性」において具体的な適宜性概念の検討を行なうのである。

しかしマケーナの議論における最大の難点は、あまりにも適宜性概念だけに終始している点であろう。この点に関しては、日本では田中 (1997) や妹尾 (2007) において周到な議論が展開されているが、スミスは TMS 初版において「徳性 (virtue)」と、社会の中の普通の態度、公序良俗としての moral とを区別して、徳性は適宜性 (その感情を引き起こした対象に照らしての適切さ) だけで成り立つものではないとし

ていた(TMS, 25 / 訳(上) 63-65; 276-78 / 訳(下) 247-51)。正義は不正を行なわないことであるが、それはただその下にある感情が適切であるということに支えられているのではなくて、むしろ自分の感情はどうであれ、相手の人間を不当に侵害しないという自分以外の人間に対する配慮に支えられている(妹尾 2007, 317-22)のである。「完全な徳性」としての徳=卓越と「不完全な徳性」としての適宜性とを明確に区別しているというスミスの徳性論では、「すぐれた理性と理解力」と「自己抑制」が結びついた徳である慎慮(prudence)が持ち込まれている(TMS, 189-90 / 訳(下) 35-38)のであるから、マケーナの適宜性概念だけですべてを片付けるわけにはいかない。加えてTMS初版には、利己心抑制と仁愛の結合が人間本性の完成されたあり方であるとする考え(TMS, 25 / 訳(上) 63-64)が明確にあるので、慎慮概念抜きではスミスの倫理思想自体が語れないのである。

特に日本においては、グラスゴウ版TMSのラフィルとマクフィによる序文を契機に、「公正な観察者」概念をめぐる初版~6版一貫説、初版 vs. 2~6版連続説、6版修正説をめぐる議論が深められてきた。適宜性概念は、まさにこれに関わるものである。日本での最新の議論は、田中(1997)の解釈に端を発した。同書は、スミスの「感情論」のスタイルによる道徳論がストア学派の道徳的序列の痕跡を残しているのは事実として、TMS初版が「完全な適宜性と完成」は人間には原理的に不可能であるとすることによって事実上秘儀化していたのが、6版では「あらゆる実行可能な環境と状況において最も完全な適宜性を持って行為する」ことの内に「完全な徳性」の実現を見るとともに、その担い手を賢明な少数者に見るストアの階級道徳論の論理がそのまま採用されている点を「キリスト教的人間像を一貫して前提しながら、適宜性道徳論の完全徳性論化を6版改訂の主題

にした」(田中 1997, (下) 212-13)としている。

これに対して、「道徳の判断の根底に働いている共感は、仁愛とは区別されているけれども、仁愛の基礎であり、仁愛ときわめて密接な関係にある。したがって、共感利己心とは異質な力であると考えられており、適切さについてのスミスの考えが利他心を前提にしていえない」といえないし、「『現実の称賛』に対する願望だけでは道徳感情の腐敗を生むことがある」という初版の議論は、2版で「世論の不公正」として明確に指摘されており、これは「6版でも変わっていない」(妹尾 2007, 431)のだから、6版で新しく書き加えられた内容もそれまでの版の基本的論点の中に組み込んで十分に理解できるとする初版から6版までの一貫説が提出された。

こうした日本のスミス研究の状況から見れば、マケーナの適宜性概念に集中した議論はいささか踏み込みが足りないといえるだろう。しかし彼が、スミスのテキストを検討する過程で最新の言語理論からテリー・イーグルトンの批評理論まで持ち込んで行なう博引旁証は、これまでのスミス研究の方向性とは異なる視点の新鮮味を持つといえるだろう。

さらに付言すれば、マケーナはヴィヴェンツァを参照していないが、付録にスミスのレトリック論の研究サーヴェイを加えている点は、欧米のスミス言語論を鳥瞰するのに便利である。そこで挙げられているホーガン(Hogan 1984)が、スミスの歴史に題材をとった「物語り(narrative)」重視のレトリック論がLRBLの最も革新的な要素だと論じ、あるいは具体的なスミスのレトリックの技法に目を向けることによって倫理的な洞察の素材として歴史的な事例を価値あるものとして用いているTMSに、そうした「間接的描写(indirect description)」が果たした役割を指摘したのは⁷⁾、LRBLにおける「平明率直な文体」の推奨ばかりに目を向けていた議論に新しい方向性をもたらしたとい

えるだろう。

最後に、マケーナ以外のこの領域における最近の成果に触れよう。ホーコンセン(Haakonssen ed. 2006)は最新のスミス研究の一つの成果を示すものであるが、その中に収録された2つの論文、すなわちフィリップス(Phillips 2006)とダスカル(Dascal 2006)がスミスの言語論を論究している。前者は、LRBLをスコットランドがヨーロッパ思想の肥沃な土壌として登場した時代のレトリック論の開拓的な存在に位置づけ、(筆写されて流通したとはいえ)出版されなかったことによりヒュー・ブレアやジョージ・キャンブルほどの波及力をもたなかったにせよ、18世紀のレトリック理論として重要なものと評価している。

スミスの歴史家への言及や修辞技術の領域拡大、歴史的な「解説」評価はこの時代にあってきわめて独自のものであったとするフィリップスの肯定的評価は、従来の言語研究分野の通説的なものとは大きく異なるものである。LRBLはスミスの講義をそのまま再現したものではなく、スミスの言葉をなるべく正確に再現しようとした2人の学生による共同作業の結果であり、その構想の一貫性と1748年「公開講義」以降の文献の参照がないことから見て大きな変更はない、としたグラスゴウ版編者J.C.ブライスの解釈に沿って、LRBLが対象領域を越えて、その後の主要著作にもつながるものと評価している。またダスカルは、認知科学と語用論研究の立場からスミス言語論に接近しており、さらに『哲学論文集』の認識論と関連させて詳細に検討している点で、評価すべきものと言えよう⁸⁾。

この領域に関連したわが国の最新の研究について一言及しておく。大島(2008)は、田中(1993)で展開されたケイムズの「欺瞞の神学」とスミスの継承関係、カルヴァン主義神学と自由意志論をめぐる議論を引き継ぎながら、スミスの言語論とTMSの同感理論に議論を集

中させた。そしてスミスの言語論に関する記述に内在することによって、無媒介的に感情が感染していくヒュームの情念論と対比されるような、コミュニケーションに媒介されたTMS初版の「想像的同感論」(田中1997,(下)172)について検討を加えている。

IV 「アダム・スミス問題」の復活と「スミスとルソー問題」

本稿に続くべきスミス研究の「在庫調べ」は、当然に彼の2つの主著TMSおよびWNそのものをめぐる諸研究の現状でなくてはならないが、本稿では最後に、そうした後続への架橋となるべく「アダム・スミス問題」をめぐる諸研究の現状を論ずることにしたい。

「スミス問題」がカール・クニースらのドイツの学者たちに端を発し、1861年にヘンリー・バックル(*History of Civilization in England*, vol. 2)によって、同感に基づくTMSと利己心に基づくWNは、正反対の人間本性論に依拠しているからこの両著は矛盾する、という形で最初に主張されたものに由来することは周知のことであろう。この「スミス問題」をその端緒から詳細に跡づけたモンテスは、それが20世紀の最後の四半世紀にたどった諸段階を3つに分けた。すなわちモンテスによれば、1976年のグラスゴウ版TMSの編集者たちであるラフィルとマクフィは、「スミス問題」を「無知と誤解に基づいた疑似問題」(TMS intro., 20)だと「頭ごなしに片付ける」ことによって第1段階の口火を切り、「問題」は存在しないことにされた。

だが第2段階において、タイクグレーバーはその取扱いは「ぞんざいで」あったと述べて(Teichgraeber 1981, 106)、ディッキーは、その問題は「今日依然として大いに生き続けている」と考え(Dickey 1986, 609)、「スミス問題」は看過されてはならないと主張した⁹⁾。最後に第3段階において、オテソン(Otteson 2000)は「真のスミス問題」が確かに存在しているのであ

て、それを解決するためにこれまで提案された若干の説明は不十分な根拠に立脚していると主張した (Montes 2004, 16)¹⁰⁾。

さてこのモンテスのいう第3段階において、「スミス問題」はまさに完全に復活を遂げたように見えるのだが (cf. Blaug 2001, 158), そうした中で哲学者オテスンによる近著 (Otteson 2002) は最も影響力があるものであり、彼の問いは全文引用されるに値する。

スミスはその生涯にたった二つの著書しか出版しなかったし、その各々が彼によって管理され、いくつかの場合には改訂されたうえで数版を重ねた。それでも WN はまるで、ひょっとしたら TMS を書いた人以外の誰かによって書かれたかのように見える。例えば、WN には TMS が言及されている箇所はどこにもない。WN には、4つの主な徳——正義、仁愛、慎慮、自己規制——は有徳な人のうちにあるという TMS で擁護された見解が言及されている箇所は、どこにもない。仁愛が自然的動機づけまたは道徳的動機づけのいずれかに少しなりとも関係があるということが WN ではほめかされている箇所は、どこにもない。WN には、人間の良心とか、公平な観察者とか、公平な観察者の手続きとかについての議論をどこにも見出すことができない。最後に、WN には、共にまず間違いなく TMS の中心の特徴をなすと考えられるスミスの同感あるいは相互的同感を求める欲望は、全く現われていない。スミスのたった二つの著作の間には、ひょっとしたら実質的な関連など全くないかもしれないということが、一体あり得るのか? (Otteson 2002, 156-57)

オテスンによる「スミス問題」の「解決」法は、こうである。すなわちオテスンによれば、TMS, WN, そして「言語の起源の諸考察」に共

通したスミスの枠組みがあるのであって、それは「市場モデル」と「親交 (familiarity) 原理」¹¹⁾である。オテスンによれば、スミスのそれら三作に共通した「市場モデル」とは、4つの発展段階を通じた社会の秩序体系の成立を示すものである。すなわち、① 動機づける欲求、② 諸ルールの発展、③ 通貨と市場 (交渉と交換)、④ 結果としての意図せざる秩序体系 (Otteson 2002, 124, 286-87)。こうした諸段階を改めてパラフレーズすれば、伝統的な道徳規準は、「相互的同感を求める欲望」によって動機づけられた道徳の「市場」において日常的に交わる平均的な諸個人を通じて、「意図されずに創造された進化的秩序体系を反映する」。道徳ルールとはこうした有機的進化の産物なのであるから、それは、「どんな個人の英知と比べても、必然的に一層大きな英知を体現している」。こうした日々の生活の意図せざる英知が、オテスンがスミスの「一種のバーク的保守主義」(321-22) と呼ぶものの基礎をなすのである。

オテスは、もしわれわれがスミスは道徳と市場との結合を意図していると理解するとしたら、TMS と WN の両著は、それらが人間の諸制度についてのただ一つの考え方を表わしている限りで整合的であると論ずる。さらに彼は、こうした論点をスミスの言語論へと独創的に拡大し、さらには『法学講義』や『天文学史』にまで敷衍できる可能性を示唆する (289)。こうしたオテスンの議論は、過度の文脈主義・文献主義には決して見出すことのできない驚くほど明快な哲学的理論モデルの構築を生み出しているので、スミス研究者のうちには「それ [Otteson 2002] は、スミスの貢献に関する新たな思考を生み出すものであると、スミス学者たちが分かって然るべき方向を指し示している」(Kennedy 2008, 42) と最大級の称賛を与える人もすでに出てきている。

もちろんこうしたオテスンの議論において、「スミスは自らの TMS を仕上げている時に

ひょっとしたら市場の見地から考えていたのかもしれないという前提は、強いものである。したがって、われわれが妥当と思われる解釈としてスミスの TMS を理解するために『道徳の市場』モデルを組み立てることができるかどうかは、合理的な再構築にかかっている」(Montes 2004, 44n. 50)。それゆえ、「スミス問題」に対するオテスンの解決法に大きな抵抗を感じる論者たちもいるだろう。おそらく「スミス問題」は、そうしたオテスンの研究を契機に、新たな、そして活発な議論を生むかもしれない。

そのひとつの徴候が、「スミスとルソー」という、わが国ではかつて内田義彦氏による『経済学の生誕』(1953) および『社会認識の歩み』(1973) によって(おそらく世界に先んじて)取り上げられた、これもまた古くて新しい問題の復活かもしれない。

そもそもオテスンの研究が出るのと前後して、P. フォースはルソーの自愛心とスミスの虚栄心とを近づけることで、「スミス問題」は問題でなくなるとの見立てを示していた(Force 2003, 256-62)。こうしたフォースの議論はどれも「スミスとルソー」問題の復活を刺激しつつあった研究状況も反映していたらしい。パック(Pack 2000)やハンリー(Hanley 2008a)は、ルソーと TMS の欺瞞理論(TMS, 183-85/訳(下) 21-25)との強い関連を強調しつつ、ルソーのスミスへの影響全体をとらえ直そうとした。

オテスンの著作が出てのち、さらにシュリーサーは、オテスンの「市場モデル」が諸個人の日常生活における交わり(交渉と交換)の場から生まれる道徳が TMS の描くものの結論だとすることに、明確にルソーの存在を介在させつつ抵抗した。すなわちシュリーサーによれば、スミスは TMS で、文明生活は「軽蔑すべくつまらぬもの」であって「欺瞞」であるという「ルソー的(あるいはストア的)見方」¹²⁾を「抽象的で哲学的な見方」¹³⁾として提示し、普通の日常生活(オテスンの「市場モデル」の前提)で

は説明できない事物の本質として提示しているように見える。少なくともスミスは、自然の「欺瞞」を同定できるような非日常的な「理論的観点」から語っており、そこにおいてルソーは、そうした観点をスミスに教えた重要な人物として現われるのだ(Schliesser 2006, 212-13)。

ラスムセンは、世界ではじめて「スミスとルソー」問題を主題とした一著を公刊した(Rasmussen 2008)。なるほどスミスは、TMS, WN において一度もルソーの名に言及することはなかった。それでも、スミスがルソーを称賛していたことは公然たる事実だったし、また『エディンバラ評論』への寄稿「同人たちへの手紙」(1756)ではスミス自身が『人間不平等起源論』(1755)を自ら訳して長い引用を行なったのだから、これまで「スミスとルソー」問題が比較的に等閑視されてきたことのほうが「驚くべき」(Rasmussen 2008, 6n. 8)ことなのである。紙幅の関係でラスムセンの近著を詳細に紹介することはできないのだが、その主張は、スミスの WN は実は全編をあげてのルソーの商業社会批判への回答として読まれるべきであって、その回答の要旨は「商業社会は非商業社会と比べて(自由と安全の両面で)まだましである」という商業社会の相対的擁護に尽きるというところにある。そして、その「まだまし」の判断基準を、スミスは一種の「費用便益分析」(160)から得たのだと言うのである。

なるほどスミスは、TMS 初版から6版まで欺瞞理論を残したという深刻な「問題」がある。だが、スミスは文明生活における富の欺瞞を主張しても、商業社会そのものの欺瞞を主張はしたわけではなかった。なぜならスミスの商業社会擁護の中心目的は、経済的(富)というよりはむしろ政治的(自由と安全)なものであったからだ。かくして TMS の欺瞞理論の残存と、WN の商業社会擁護論とは両立するのであって、言われる深刻な「問題」は解決できるのだ(132-37)——なるほど。だが、ラスムセンに

対しては、さらにこうも問いかけることができるかもしれない。すなわち、商業社会が与えるように見える「自由と安全」も、実は「欺瞞」である可能性はないのか？¹⁴⁾

V おわりに

近年の海外における人文諸科学、なかんずく古典文学、言語学、宗教、さらには「アダム・スミス問題」ならびに「スミスとルソー問題」のそれぞれの復活といった諸主題におけるスミス研究をこうして見てきたわけだが、注目されるのは、そうした諸研究を担う若い研究者たちが海外では確実に輩出しているということである。例えば、モンテスとシュリーサーの編著 (Montes and Shliesser, eds. 2006) に集結した14人の研究者たちや、ラスムセン (Rasmussen 2008) などはみな、1960年代から1970年代の生まれであり、彼/彼女らは今後ますますスミス研究を発展させてくれるはずである。

翻って、半世紀前までは世界に冠たるスミス研究の質と量を誇ったわが国の現状はどうであろうか。スミス研究には、経済思想史研究に限ってみても、さまざまな主題と領域とにおける開拓の可能性が開かれていることを、世界の（とりわけ若手の）研究者たちは感じ取っている。われわれはわが国の学界において、一人でも年若い研究者がそうしたスミス研究の可能性に気づいてくれること、そしてその可能性を切り開いてくれることを、切に願ってやまない。

本稿は、海外で実際に切り開かれてきたそうしたスミス研究の可能性の一端を俯瞰してきたのだが、さらに海外スミス研究の現状の全体像に近づくためには、スミスの二冊の名著 TMS および WN をめぐる海外の諸研究の「在庫調べ」を俟たなくてはならない。

大島幸治：実践女子短期大学
佐藤有史：湘南工科大学

注

- 1) スミスは LRBL においてリウイウスに頻繁に言及しているが、マケーナ (McKenna 2006) はこうした点について特に注目していない。だがフィリップスは、観察者の公平性手続きにかかわる「間接的記述方法」との関連でリウイウスならびにタキトゥスに注目した (Phillips 2006, 75-77)。
- 2) その後ヴィヴェンツァは、今日の「スミスと古典主義」研究について2つの主流があることに注記し、第1の古典主義をスミスについての特定の解釈的鍵鑰とする研究——例えば、ストア主義 (Brown 1994) とか懐疑学派 (Griswold 1999) ——と、第2のシヴィック・ヒューマニストもしくは自然法のパラダイムにおける文化的文脈の解読研究——スミスはその中の登場人物の一人にすぎない——とを比較し、後者のほうが望ましい方法だと主張した。前者は、スミスが書いたものを越えて、しばしばスミスが書かなかったものまで「含意」によって解釈しようとするからというのである (Vivenza 2004, 116-18)。
- 3) ちなみにヴィヴェンツァは、スミスがポリュビオスから同感概念をとった可能性を1797年に最初に指摘したのはアリストテレスの翻訳で知られるギリスだとしたが (Vivenza 2001, 44n. 19)、匿名氏、アミクスのスミス会見記でもスミスとポリュビオスとの (リウイウス以上の) 親近性を指摘していて、こちらは1791年のものである (LRBL, 229 / 訳 347)。
- 4) ヴィヴェンツァ以後の試みの一つとして、スミスのアリストテレス受容における、誤解と断絶とを強調するテンプル・スミスも参照せよ (Temple-Smith 2007)。
- 5) フィッシュのいわゆる「解釈的転回 (interpretive turn)」を見よ。すなわち、「…伝統的に記述的語彙とそれらの対象との間で得られると考えられた関係の正反対。普通で常識的な仮定は、諸対象が先にあるのであって、それゆえ、それらから作り出される描写を制約すると同時に判断するというものだ。言語は、事実の世界に従属し、それに仕えると言われる。だが近年

は、言語は構成的な役割に昇進されて、さまざまなタイプの理論家たちによって…諸事実を単に報告するというよりはむしろそれらを存在せしめる…と宣言されてきた。そして、もし歴史的記述の言語が進歩や衰退や統合や分散といった諸概念で充満しているとしたら、歴史的研究はこうした特徴を示す出来事を生み出すだろう…」(Fish 1994, 56-57)。

- 6) そうした課題への一歩として、大島 (2008) を参照せよ。
- 7) だが、上注 1 も見よ。
- 8) これら 2 つの論文については、さらにハンリー (Hanley 2008b) による概評を見よ。またスミスの言語論研究ということで言えば、オテスン (Otteson 2002) によるスミスの「諸言語の起源に関する諸考察」(LRBL, 201-26) の研究に言及しないわけにはいかないが、オテスンについての議論は以下の第 4 節に譲る。
- 9) ディッキーは、ラフィ爾 (Raphael 1992, 112-16) によってまさに「暴力的に」(Tribe 1999, 613n. 22) 酷評された。ラフィ爾は、利己心は行為の動機であるが、同感^①は道徳判断の能力であって行為の動機ではないから両者は矛盾しないとし、「同感」の意味のディッキー側での「誤解」をここでも訴えている。
- 10) 最近のゴチュメンによる全編「スミス問題」にあてた一著 (Göçmen 2007) は、まさに「スミス問題」復活を象徴するものだが、同書は、TMS は WN で分析された商業社会を批判するための基礎を与える書であるという驚くべき結論——それ自体、「問題」の存在を前提した主張——を与える。
- 11) オテスンは参照することがなかったが、この原理に似たものの「スミス問題」への関与性はすでにニーリによって指摘されていた (Nieli 1986)。ただしニーリにはオテスンほどの明快さはなかった。
- 12) もっとも上述のように、田中 (1993, 120-21) は、スミスの欺瞞理論の重要な想源をルソーではなくてケイムズに求めたが。
- 13) ちなみに WN では、日常的知覚とは異なる「抽象的な観念」としての「交換価値」が重要な意

義を有することに注意が喚起されていたとも言えよう (WN, 46, 49 / 訳①61-62, 66)。

- 14) 例えば、「国内統治は、財産の安全のために設置されるものである限り、実際には、貧者に対して富者を防衛するため、あるいはいくらかの財産をもつ人々を、何の財産も持たない人々から防衛するために、設置されているのである」(WN, 2:715 / 訳③382) のような文章をどう読むかということだが、概してラスマセンの主張は、スミスとルソーとの距離をやや強調しがちなようである。

参考文献

- Bazerman, C. 1994. *Constructing Experience*. Carbondale, Ill.: Southern Illinois Univ. Press.
- Blaug, M. 2001. No History of Ideas, Please, We're Economists. *Journal of Economic Perspectives* 15 (1): 145-64.
- Brown, V. 1994. *Adam Smith's Discourse: Canonicity, Commerce and Conscience*. London: Routledge.
- Dascal, M. 2006. Adam Smith's Theory of Language. In Haakonssen, ed. 2006, pp. 79-111.
- Dickey, L. 1986. Historicizing the "Adam Smith Problem": Conceptual, Historiographical, and Textual Issues. *Journal of Modern History* 58 (3): 579-609.
- Dupuy, J. P. 1992. *La Sacrifice et l'Envie, Le libéralisme aux prises avec la justice sociale*. Paris: Calmann-Lévy. 米山親能・泉谷安規訳『犠牲と羨望』法政大学出版局, 2003 年。
- Endres, A. M. [1991] 1994. Adam Smith's Rhetoric of Economics: An Illustration Using "Smithian" Compositional Rules. In Wood, ed., 1994, vol. VII: 202-22.
- Fish, S. 1994. *There's No Such Things as Free Speech and It's a Good Thing, Too*. New York: Oxford Univ. Press.
- Force, P. 2003. *Self-Interest before Adam Smith: A Genealogy of Economic Science*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Göçmen, D. 2007. *The Adam Smith Problem: Human Nature and Society in The Theory of Moral Sentiments and The Wealth of Nations*. London: Tauris Academic Press.
- Griswold, C. L. 1999. *Adam Smith and the Virtues of En-*

- lightenment*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Haakonssen, K., ed. 2006. *The Cambridge Companion to Adam Smith*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hanley, R. P. 2008 a. Commerce and Corruption: Rousseau's Diagnosis and Adam Smith's Cure. *European Journal of Political Theory* 7 (2): 137–58.
- . 2008 b. Language, Literature and Imagination. *Adam Smith Review* 4:221–30.
- Hogan, J. M. 1984. Historiography and Ethics in Adam Smith's Lectures on Rhetoric, 1762–1763. *Rhetorica* 2:75–91.
- Howell, W. S. [1969] 1975. Adam Smith's Lectures on Rhetoric: An Historical Assessment. *Speech Monographs* 36:393–418. Rpt. in chapter 6 of his *Eighteenth Century British Logic and Rhetoric*. Princeton: Princeton Univ. Press, 1971, and also rpt. in *Essays on Adam Smith*, edited by A. S. Skinner and T. Wilson. Oxford: Clarendon Press, 1975, pp. 11–43.
- IIASS (International Adam Smith Society). 2005–08. *Adam Smith Review* vols. 1–4. Issued annually. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Kennedy, G. 2008. *Adam Smith: A Moral Philosopher and His Political Economy*. Basingstoke, Hants: Palgrave Macmillan.
- Labio, C. 2006. The Solution is in the Text: A Survey of the Recent Literary Turn in Adam Smith Studies. *Adam Smith Review* 2:151–78.
- McKenna, S. J. 2006. *Adam Smith: the Rhetoric of Propriety*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Marshall, D. 1984. Adam Smith and the Theatricality of Moral Sentiments. *Critical Inquiry* 10 (4): 592–613.
- . 1986. *The Figure of Theater: Shaftesbury, Defoe, Adam Smith, and George Eliot*. New York: Columbia Univ. Press.
- Montes, L. 2004. *Adam Smith in Context: A Critical Re-assessment of Some Central Components of His Thought*. Basingstoke, Hants: Palgrave Macmillan.
- Montes, L. and E. Schliesser, eds. 2006. *New Voices on Adam Smith*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Nieli, R. 1986. Spheres of Intimacy and the Adam Smith Problem. *Journal of the History of Ideas* 47 (4): 611–24.
- Otteson, J. R. 2000. Recurring “Adam Smith Problem.” *History of Philosophy Quarterly* 17 (1): 29–44.
- . 2002. *Adam Smith's Marketplace of Life*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Pack, S. 2000. The Rousseau–Smith Connection: Towards an Understanding of Professor West's “Splenetic Smith.” *History of Economic Ideas* 8 (2): 35–62.
- Pelikan, J. J. 1989. *Christian Doctrine and Modern Culture (Since 1700)*. *The Christian Tradition: A History of the Development of Doctrine*, vol. 5. Chicago: Univ. of Chicago Press. 鈴木浩訳『キリスト教の伝統 第5巻 キリスト教教理と近代化』教文館, 2006.
- Phillips, M. S. 2006. Adam Smith, Belletrist. In Haakonssen, ed., 2006, 57–78.
- Raphael, D. D. 1975. The Impartial Spectator. In *Essays on Adam Smith*, edited by A. S. Skinner and T. Wilson. Oxford: Clarendon Press.
- . 1992. Adam Smith 1790: The Man Recalled; The Philosopher Revived. In *Adam Smith Reviewed*, edited by P. Jones and A. S. Skinner. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- . 2007. *The Impartial Spectator: Adam Smith's Moral Philosophy*. Oxford: Clarendon Press. 生越利昭・松本哲人訳『アダム・スミスの道徳哲学—公平な観察者』昭和堂, 2009.
- Rasmussen, D. C. 2008. *The Problem and Promise of Commercial Society: Adam Smith's Response to Rousseau*. University Park, Pa.: The Pennsylvania State Univ. Press.
- Schliesser, E. 2006. Adam Smith's Benevolent and Self-Interested Conception of Philosophy. In Montes and Schliesser, eds., 2006, 328–57.
- Schmidt, C. 1985. *La Sémantique économique en question*. Paris: Calmann-Lévy.
- Skinner, Q. 1997. *Liberty Before Liberalism*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 梅津順一訳『自由主義に先立つ自由』聖学院大学出版会, 2001.
- Smith, A. [1759] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. Edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』(全2巻)岩波文庫, 2003.
- . [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Edited by R. H. Campbell, A. S. Skinner, and W. B. Todd. Oxford: Clarendon Press. 2 vols. 水田洋監訳, 杉山忠平訳『国富論』(全4巻)岩波文庫, 2000–2001.
- . 1983. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. Ed-

- ited by J. C. Bryce. Oxford: Clarendon Press. 水田洋・松原慶子訳『修辞学・文学講義』名古屋大学出版会, 2004.
- Teichgraeber, R. F. 1981. Rethinking Das Adam Smith Problem. *Journal of British Studies* 20 (2): 106–23.
- Temple-Smith, R. 2007. Adam Smith's Treatment of the Greeks in *The Theory of Moral Sentiments: The Case of Aristotle*. In *New Perspectives on Adam Smith's The Theory of Moral Sentiments*, edited by G. Cockfield, A. Firth, and J. Laurent. Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Terry, R. 1999. "The Sound Must Seem an Echo to the Sense": An Eighteenth-Century Controversy Revisited. *Modern Language Review* 94 (4): 940–54.
- Tribe, K. 1999. Adam Smith: Critical Theorist? *Journal of Economic Literature* 37 (2): 609–32.
- Vivenza, G. 2001. *Adam Smith and the Classics: The Classical Heritage in Adam Smith's Thought*. Oxford: Oxford Univ. Press. Originally published in Italian as *Adam Smith e la cultura classica*. Pisa: Il pensiero economico moderno, 1984.
- . 2004. Reading Adam Smith in the Light of the Classics. *Adam Smith Review* 1:107–24.
- Wood, J. C., ed. 1994. *Adam Smith: Critical Assessments—Second Series*. 3 vols. London: Routledge.
- 大島幸治. 2008. 『アダム・スミスの道徳哲学と言語論』御茶の水書房.
- 金 山徳. 2008. 『プロテスタント・スコラ神学の再考察』新教出版社.
- 妹尾剛光. 2007. 『コミュニケーションの主体の構造 (増補三訂版)』北樹出版.
- 只腰親和. 1995. 『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版.
- 田中正司. 1993. 『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房.
- . 1997. 『アダム・スミスの倫理学 (上・下)』御茶の水書房.
- 村川 満. 2008. 『ウェスミンスター信仰告白研究』一麦出版社.
- 山崎 怜. 2005. 『アダム・スミス』研究社.

The Recent Increase of Adam Smith Studies in the Field of Humanities and the Revival of *Das Adam Smith Problem*:

A Review

Koji Oshima
Yuji Sato

As put by M. Blaug at the beginning of the twenty-first century, “[o]ver the years, Smith has turned out to be one of the subtlest and most complex thinkers in the whole of history of economic thought. The flood of books and articles on various aspects of his writings have been nothing short of amazing and we are sorely in need of a new stock-taking.” (Blaug 2001, 158)

This review article is intended to provide the “stock-taking” of the recent Adam Smith Studies in the field of humanities, say from the Classics to philosophical studies, through various achievements in the areas of literary and linguistic studies, which have emerged mainly over the last decade. Considerations of the elements of religious thought, such as whether Adam Smith’s concept of an “impartial spectator” is Stoic or Christian, will also be registered.

We then proceed to review the recent revival of *Das Adam Smith Problem* and the correlatively rekindling debates over the nature of the “Rousseau and Smith” relationships. To find a solution to these problems, we really need interdisciplinary Smith studies that involve economics, philosophy, political science, and so on, and we are particularly interested in these disputes. All of us know that they are the most important for both the Adam Smith Study and the history of social as well as economic thought, and the two problems are of the kind that must be settled by all means. Therefore, we will be highly delighted if this review is successful in promoting some kind of effort for such a solution in Japan.

JEL classification numbers: B 12, B 31, A 12.